

沖

1
2022

俳句雑誌【おき】



海鼠腸

能村 研三

公民館の思い出

市川の葛飾八幡宮境内にある、中央公民館が昨年十一月一杯で閉館し建物が壊されることになった。「沖」にוותて創刊以前から深くかわりがある建物で、残念でならない。

この建物は明治期に新潟県で建築された邸宅を、私が生まれた年の昭和二十四年に移設されたもので、葛飾八幡宮の近くにたたずむ二階建ての建物のロビーは、重厚な太い梁や柱が目を引き、優しい木材の温かみを感じられる。

秋嶺を統べて城下の気韻かな
小間切れに使ふ時間や添水鳴る
昼月に吹かれぎんなん落つる日よ
早々と外鍵かけて十三夜

「沖」創刊以前、先師登四郎は「市川馬酔木会」、その後「森の会」と改称された俳句会を、この公民館で催していた。会場の事前予約は母の担当で、幼い頃は母に連れられて出かけたことが思いだされる。小学生になってからは、父から頼まれて句会の道具と、その日の席題が書かれた半紙を事前に句会場に届ける仕事があった。さらに中学生になってからも市川市俳句大会の中学生の部で一位をとった時に、表彰

うそ寒や櫛比欠けゆく裏通り

された場所もここであった。柴田白葉女、岸風三樓、阿部宵人といった錚々たる俳人と、公民館の庭でとった写真が今でも残っている。

竹幹のみどり確かに猟期来る

「沖」が創刊されてからも、中央例会の会場はこの公民館の和室で、私が初めて「沖」の本部句会に出席したのもここで、しばらくしてから句会の採点の仕方を、河口仁志同人から教えてもらった記憶も印象深い。

鴟猛る結界石の結び瘤

その後「沖」の例会は、市民会館や文化会館で行われることもあったが、時折公民館で開催されることもあった。

山峡の梓杉稚し神迎

近年になってからは中央公民館の俳句講座を頼まれ、講座が終了してから、その仲間を中心にグループ句会が発足し、現在の「四季の会」や「かつしか句会」が現在でも活動を続けている。

どう見ても届かぬ梯子柚子は黄に

毎年秋には公民館の文化祭が行われ、メンバーの色紙短冊を展示した。

この公民館は、ある意味で「沖」の五十年の歴史を、一緒に歩んでくれた思い出の建物である。

海鼠腸を啜り喉元細うせり

能村 研三

朱 鑾 下 げ 大 先 生 に 診 て も ら ぶ
 バ ン ダ ナ の 老 人 狩 の 掟 説 く
 狼 を 信 じ つ づ け て 男 老 ゆ
 月 蝕 や 狐 の 提 灯 過 り を り
 枯 野 行 く 見 え ざ る も の に 戦 き て
 蛸 踊 り 竹 輪 笛 吹 く お で ん 鍋
 山 頂 や 鈴 鳴 る や う に 寒 昂

登四郎先生の句集『羽化』を読んで、平成十二年の元日に詠まれた句に目を止めた。先生はきつと起床してお風呂に入つて後に朝食をとるのが慣いだつたのであろう。その起床からお風呂までに詠まれた数句の中の七句を挙げてみよう。朝の最初にへ初明り浴び立血つ我や九十歳へ次にへ清らなる一月はわが生れ月へでへ初明りの中なる己れ礁かにゐてへ元旦の穏やかな日を誰も褒むへ新年のまづ仰ぐもの庭の松へ賜りしこの一年をひしと抱くへ初湯出てすこし身軽き立ち居かもなどがある。

先生は一月五日生まれという。初めの三句からは起き抜けの思考で、五日後には大きな区切りの九十歳になるという手応えを持ち、それからいつものように庭へ出たのであろう。そして淡々とした思いで、穏やかに元旦を迎えたことを寿ぎ、昨日と同じようにご自分の分身とも思える庭の松に「また一年よろしく」とでも声をかけ、朝風呂を気持ち良く終えたのである。

蒼茫集

火の性

栗原 公子

秋 霖 の 昼 を 灯 せ る 楽 器 店
 秋 澄 め り 心 に 余 る も の は 捨 て
 * 我 に な き 火 の 性 羨 し 曼 殊 沙 華
 晩 学 の 浮 き つ 沈 み つ か い つ ぶ り
 パ ソ コ ン に 未 知 な る 機 能 神 の 留 守
 カ フ ェ ・ ラ テ に シ ナ モ ン を 振 る 今 朝 の 冬

膝抱いて

千田 百里

べ っ た ら 市 過 ぎ て 素 の 街 風 の 街
 ま だ ち よ つ と 走 れ る 小 春 日 の 信 号
 杉 玉 の 新 の 蔵 町 し ぐ れ 呼 ぶ
 紅 葉 ・ 黄 葉 の 重 な り 合 う て 樹 下 冥 し
 膝 抱 い て を れ ば 十 一 月 の 鴟
 * ウ イ ズ コ ロ ナ ・ ウ イ ズ ハ ズ バ ン ド 秋 深 し

縄文

林昭太郎

縄文の夜も音かくや木の実降る
木の实落つ一つは水の音立てて
遺句集にあまたの付箋菊日和
天辺は夢をみる場所木守柿
ソプラノは空の高みへ水澄めり
*蕎麦咲いて信濃は月の大きな国

精一杯

辻美奈子

*茶の花のこれが精一杯の白
草枯れてかすかなる金放ち初む
冬蝶の咲くごとく翅かがやかす
木枯一号口笛のよくとほり
これよりは嘘の通らぬ枯木山
外套のちから釦も昭和かな

猿梨

大畑善昭

嫌な字は鬻體と蝮局蛇穴に
*好きな字は鳳凰の二字鳳仙花
今行けば山の猿梨旨き頃
句会後の一献もよし露地落葉
露ころりころりえやみも退き始む
今日はよく晴れたり屍尿葛の実

平方根

杉本光祥

地球儀の軸に傾き十三夜
文化の日感謝を籠めて遺言状
目を病むは僻地住まひや秋の暮
栄一渋沢史料館の偉業をたたへ大菊花
木曾路かな夕日塗しの柿すだれ
*シリウスや無限に続く平方根

潮鳴集

草の檻 村上葉子

* 少し行くもう少し行く十三夜
傷負ひし林檎ひたすら香を放つ
秋燕や女ひとりで二反の田
無個性といふも個性よ柿の蒂
秋蝶の自ら入りし草の檻

決心 川高郷之助

* 決心とは迫らるるもの鉦叩
小金には困らぬ運とや青瓢
推敲をしてをりレモン嚙んでをり
決着のつきたる後の秋思かな
うそ寒や知らぬ人より謹呈本

門出 小林陽子

沈黙の色となりたる吾亦紅
* 都鳥売られた喧嘩買うてをり
冬に入るタングステンの電球も
枯芝のこの弾力を晩節に
新海苔をぱりつと吾子の門出かな

十三夜 中村重幸

サイロより高きものなし鱗雲
* 鶏小屋に万羽の寝息十三夜
柿もろともに空を大きくひねりけり
巡査には本物出でし村芝居
鳥渡るふるさとのなき官吏の子

帰り花 大森春子

行く秋をショパンで送るピアノスト
物置に眠れる木馬星月夜
* 白もまた強き色なり帰り花
鬼柚子のめでたき黄色床の間に
弁慶の往生見たり破芭蕉

鳴き竜 平松うさぎ

紅葉且つ散る鳴き竜の声鏗びて
* 風のグリッサンド柿紅葉終章
土器を投げ枯野の暮色かな
漣の風の詩へと鳩潜る
ピアノニッシモの音の透明冬銀河

柚子の浮力 富川明子

* 鶏頭の満願のごと種とばす
立冬や苦き散葉効きさうな
いつ見ても暮色まとへり野紺菊
菊人形咲き切り悲恋でなくなりぬ
仕舞湯の柚子の浮力を労ひぬ

工具箱 広海あぐり

* 数へ日の底まで探す工具箱
北風強き日は踵に神の棲み給ふ
蔦紅葉迷路のやうな美術館
佗助や芭蕉の笠のちひささよ
幾度も描く間取り図小鳥来る

印画紙 荒井千瑳子

寶石の色もて石榴ペルシアより
雁渡し砂の埋めゆく流人墓
をみなへし生活省けば句も痩せて
* 百合鷗白には染まぬ自由あり
冬日没る川面は瞬の印画紙に

地図帳 本池美佐子

赤い実のもう食べごろか小鳥来る
葺き替へし屋根の鋭角十三夜
剥製の熊の咆哮秋時雨
* 地図帳に数多の記号鳥渡る
潤れ井戸に子らの声降る木の実降る

飛鷹選評



能村 研三

黄落のひとつひらづつに羽生まれ

浜田はるみ

「黄落」には「黄葉して散る」という「動き」の感じが含まれているように思う。銀杏など広葉樹が日を浴びながら黄色く色づいて散ってくるさまは美しい。じつと観察していると、一直線におちてくるもの、ひらひら舞いながらくるもの、偶然の突風にあおられるもの等千差万別だが、作者はひとつひらづつ散る黄葉を鳥のように詠んだ。しかも「羽生まれ」と明るく前向きに捉えたのがすばらしい。

身ほとりのものの錆びゆく秋の夜

里村 梨邨

ここで言う「身ほとりのもの」とは、本や雑貨、衣類などの物ばかりではない。人と人の関係や自らの心の中に「あるものも含まれる。昔から」ものあはれは秋こそまされ」といわれているが、人生や人間そのものの存在に哀れさを感じるもので、秋の夜ともなればなおさらである。

綿虫のこんなに群れてゐて静か

坂下 成紘

綿虫は雪のように、ふわふわと飛び回る不思議な生き物。雪国では雪虫と呼ばれ、浮遊するのは秋の終りから初

冬にかけてで、無風でよく晴れた日に群れ飛ぶ。だからと言って羽の音が聞こえるわけではなく、静寂そのものである。

銀杏散る日輪少しづつ奪ひ

枇杷木 愛

先ほどの浜田さんと同じように、銀杏の葉が日に照らされながら散る様子を詠んだ句。青空を背景に秋の日輪を少しずつ奪いながら、それを力として散っていくのだろう。秋の終りを象徴する美しさがあり、一枚また一枚と黄金色に輝きながら散る姿には風情がある。

日輪の瓔珞のごと曼珠沙華

藤野 武彦

曼珠沙華の花の姿は、先端が天に向かって真っすぐに伸び、少し大げさに反り返った花弁と突き出した蕊のかたちは神秘的である。瓔珞とは仏像などの身を飾るものとして用いられた装身具で、珠玉や貴金属で作られたもの。比喻を活かした句である。

いくつかは叶ひし夢や温め酒

吉村 涼子

重陽の日、酒を温めて飲むと病気にかからないといわれた。このころは寒さもつとつとくるので、酒を温めて飲むにもよいころである。健康を願う儀式でもあり、温め酒を飲みながらこれまでに夢に描いたことを振り返ってみると、いくつかは叶えられたものもあると述べ懐した。

束の間の縄文いろに枯れてをり

原 ひろ子

原さんがおられる茅野市には縄文遺跡がある。草木の枯れた蕭条とした枯野にいと、縄文時代も同じ色をした枯野が果てしなく広がっていたのだろう。束の間のあいだ古代人になった気分浸った。

草笛

(年間二十句)

成宮紀代子

春雪やひとり飲む分湯を沸かし
産声孫・凜乃を聞かむと開き初桜
粉ミルクの匙のももいろ春夕べ
パソコンの中のごみ箱臙濃し
紐付きのスケッチブック麦の秋
十葉や日差し戻らぬまま暮れて
草笛を言葉のやうに吹きぬたる
和多津美の潮風含む茅の輪かな
夕顔やハミングとなる子守唄

炎天や簡単な地図持たされて
窓に置く星の一粒今日の秋
母の忌や白桃密々と香り
月光の波動身内に届きたる
会へぬままの別れとなりぬ銀河濃し
十月や大きな鏡拭き上げて
いつまでも続かぬ強気あきざくら
寄せ鍋やさうは好きでも無い人と
画素数の減りゆく心地日向ぼこ
壁紙に遺る爪あと米こぼす
昆布締め梅村すみを様の淡きあめ色雪催ひ



『羽織』(自選二十包)

小野 寿子

津軽なり星の匂ひの凍豆腐
盆踊りやがて雪来る地を蹴つて
秋ざくら生涯津軽より知らず
雪に雪また雪北国なればこそ
山眠る千人風呂に首浮かせ
しじみ売りじよんがら節を高々と
一爆の風うすものの袖に入る
半襟干す一月の水叩きつつ
夏帯締めなまけ心もぎゆつと締め

ほほゑみの子の遺影にも夏立てり
逆縁を背負ふ切なさ胡瓜もみ
紙風船ひとりが打てばひとりの音
小鳥来る母の手紙のやうにくる
馬の眼に残暑の沖のあをあと
海霧岬見えぬものみて嘶けり
寒明けの海鳴りに張る馬の耳
朴落葉踏みつつ白神畏れけり
こころにも草の芽あかりと申すもの
解く帯の体温たたむ星月夜
冬羽織小町の絵とてあざやかに

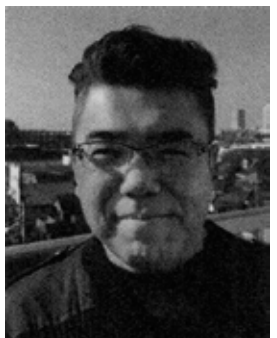


年間二十句

澤田 英紀

荒波を統ぶる鯨の尾の太し
光まで食む芋虫のうすみどり
散紅葉風の画伯の貼り絵めく
天つ風磨く星々冴ゆるなり
一陽来復朱雀となる入日
银杏枯る千手観音立つやうに
忠敬の四千万歩冬銀河
一閃の射手座の一矢獵期果つ
立春立志青年となる一日

雪解川山のいのちの逞しく
緑蔭を駆くる風あり車夫のあり
夏暁の竹刀打ち込む音清し
青紫蘇の葉脈なぞり雨滴落つ
バツクミラー故郷小さく虹の中
ビー玉の芯に灯りし夕焼かな
早天の稲穂を梳かす風の櫛
つれづれに夕日へ凭る案山子かな
秋耕の土の生命の真新し
海原を刈る台風の刃かな
深淵の闇に身を研ぐ冬の雷



沖作品



能村研三選

秋の朝ガスの炎色に濁りなし

埼玉

浜田はるみ

* 黄落のひとひらづつに羽生まれ

固き決意や椽の実を握りしめ

天窓を開けて漕ぎ出す天の川

漁家のはや灯を落とすがれ虫

前評判の飛び六方や村歌舞伎

* 身ほとりのものの錆ゆく秋の夜

日の出待つ嶺になだるる天の川

沼辺り霧の立ち込め獺期来る

十月と云ふに飛び舞ふ浪の花

鴨のけたたましきはいつも急

* 綿虫のこんなに群れてゐて静か

何屋さんだつたの更地草紅葉

長竿を空に差し込み柿を挽ぐ

千葉

里村 梨邨

石川

坂下 成紘

* 銀杏散る日輪少しづつ奪ひ

静岡

枇杷木 愛

石路叢にささる雨おと初時雨

昼月の鎌を吹き上げ神渡し

雀来て茶の花こぼしつ々移る

綿虫の日暮れの綿の重かりき

* 日輪の瓔珞のごと曼珠沙華

放棄田の十寸穂の芒盛りかな

まづ笑ひ最後涙の村芝居

朝鴉や菜園小さき武家屋敷

木犀の誘ひ今朝の迷ひ道

嘶家の手繰りの粹や走り蕎麦

固茄でと一声掛ける走り蕎麦

新米や納屋に古びし鞍のあり

* 二胡の音や南京町の秋深し

いくつかは叶ひし夢や温め酒

千葉

藤野 武彦

市川市

吉村 涼子